

あきたこまちRとは

- 「あきたこまち(母)」に、カドミウム低吸収品種「コシヒカリ環1号(父)」を交配した後、「あきたこまち」を7回戻し交配してできた品種(交配育種)です。
- **収量、品質、食味等の特性は「あきたこまち」と同等**で、カドミウムをほとんど吸収しないという特性を持っています。
- 「あきたこまちR」に切り替わっても、**これまでの「あきたこまち」と栽培管理は同じ**です。

あきたこまちRに切替する理由は

- **海外の基準値に合わせて国内基準値が厳しくなっても対応できるようにするためです。**
→米産県として将来を見据え、国内外の消費者に安全なコメを供給していくことが重要です。
- 海外ではカドミウムやヒ素の基準は日本より厳しい
 [カドミウム] 日本 0.4ppm → 香港・シンガポール 0.2ppm、EU 0.15ppm
 [無機ヒ素] 日本 未設定 → 香港・シンガポール・コーデックス委員会 0.35ppm
- 輸出拡大にも対応が必要
- **「カドミウム」と「ヒ素」の両方を低減するためです。**
→カドミウムとヒ素の水管理の対策は全く逆になります。カドミウム低吸収の「あきたこまちR」に切り替えると、湛水管理が不要となり、両方を低減することが可能となります。

米袋の表示

- 「あきたこまちR」は、「あきたこまち」と形質や品質の評価に差がないので、品種群として1つの銘柄となり、米袋の銘柄は「あきたこまち」と表示されます。

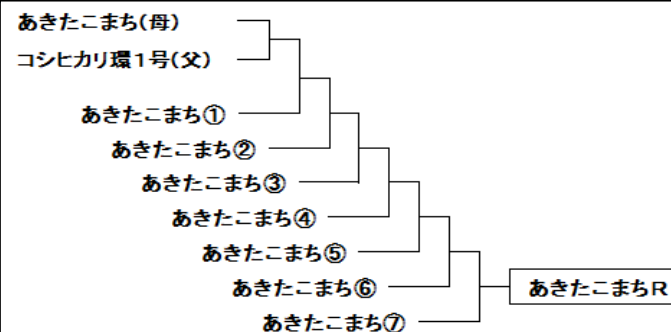
※農産物検査時の品種名は、「あきたこまちR」となります。

美の国あきたネットの【**水稻新品種「あきたこまちR」を紹介します!**】
 (https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/73119) をご覧ください。

【QRコードはこちら】

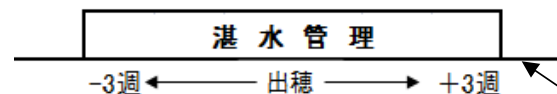


あきたこまちRの育成系譜

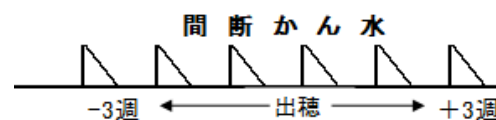


カドミウムとヒ素の吸収を抑制する水管理の違い

【カドミウム対策】出穂前後各3週間「湛水」管理



【ヒ素対策】出穂前後各3週間「節水」管理



米袋の表示

検査証明書		
令和7年産	水稻うるち玄米	荷造り、包装及び左記の事項を証明する。
銘柄	秋田県産 あきたこまち	
正味重量規格	等級	
30kg		
皆掛重量		
30.5kg		

検査請求者記載欄

検査請求者 秋田 太郎
 住 所 秋田県秋田市山王四丁目〇番〇号
 生 産 地 秋田県秋田市
 品 種 名 (あきたこまちR)

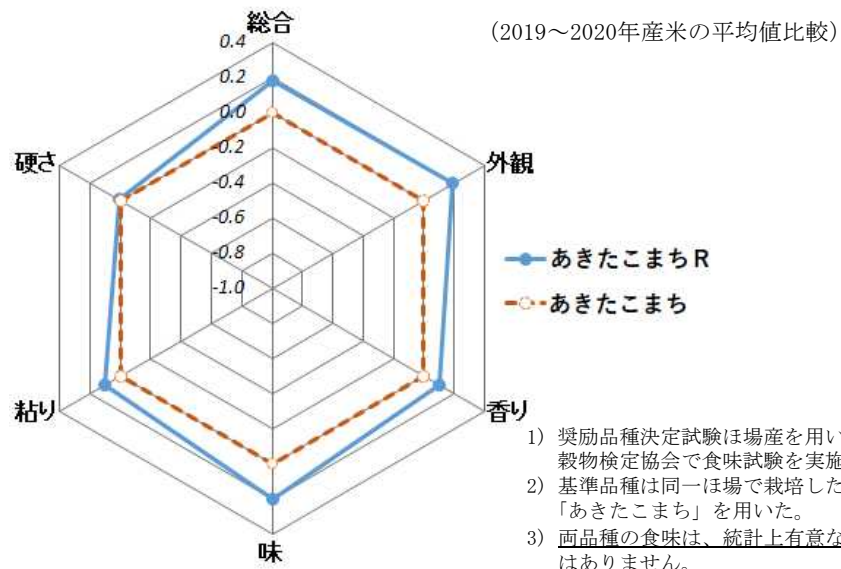
「あきたこまちR」の特性は「あきたこまち」と同等です

(農業試験場、2019~2021年平均)

品種名	あきたこまちR	あきたこまち	
早晩性	早生	早生	
草型	偏穂数型	偏穂数型	
耐病性	いもち耐病性		
	遺伝子型	<i>Pia</i> 、 <i>Pij</i>	<i>Pia</i> 、 <i>Pij</i>
	葉いもち	中	中
	穂いもち	やや弱	やや弱
白葉枯耐病性	やや弱	やや弱	
耐倒伏性	やや弱	やや弱	
耐冷性(障害型)	中	中	
穂発芽性	やや難	やや難	
高温登熟性	中	中	
出穂期(月日)	7.27	7.27	
成熟期(月日)	9.05	9.06	
間長(cm)	76.8	77.1	
穂長(cm)	17.3	17.6	
穂数(本/㎡)	439	433	
収量(kg/a)	57.3(98)	58.8(100)	
千粒重(g)	22.6	22.8	
品質(1~9)	1.8	2.0	

※秋落ちしやすいほ場では「ごま葉枯病」に注意が必要です。

「あきたこまちR」の食味は「あきたこまち」と同等です



「あきたこまちR」の質問にお答えします

質問① 放射線育種による米ですか

○ 「あきたこまちR」は、放射線を照射して育成した米ではありません。「交配育種」による米です。

※ 「コシヒカリ環1号」は、コシヒカリの種子に1度だけ放射線を照射して突然変異を誘発し、カドミウム低吸収性を持つ株を選抜した後、6世代以上栽培し、選抜を繰り返し育成された品種です。

※ 放射線育種は、何十年前前から多くの農作物の品種改良に使われ、自然界でも起きる突然変異を利用した一般的な育種法です。

※ 普段、放射線育種による多くの農作物が食べられており、安全性に問題はなく、有機栽培としても認められます。

質問② なぜ、全県的に「あきたこまち」から「あきたこまちR」に切り替えるのですか

○ 海外ではより厳しいカドミウム基準値を設定している国が多く、今後世界基準に合わせて国内基準値が厳しくなることが見込まれ、そうなること、県内の一部だけの問題ではなくなります。

○ また、ヒ素の基準値を設定している国が多く、国内基準値が新たに設定されることが考えられますが、その対策は、カドミウムと全く逆の水管理が求められることとなります。

○ したがって、海外への販路拡大とともに、将来を見据え、より厳しい基準になっても「米どころ秋田」で安全な米生産ができるように全県的に切り替えることが重要です。

質問③ 栽培方法はこれまでと同じでいいですか

○ 出穂期や成熟期、収量性や品質等は「あきたこまち」と同等で、基本的にこれまでと同じ栽培方法で問題ありません。

○ ただし、生育に問題は無いものの、マンガンの吸収能力が低下していることから、一部の秋落ちしやすいほ場では「ごま葉枯病」の発生に注意が必要ですが、田植え時に使われる「いもち病」防除剤の種類を工夫すれば問題ありません。

○ 引き続き、稲づくりの基本である「土づくり」に努めることが重要です。